

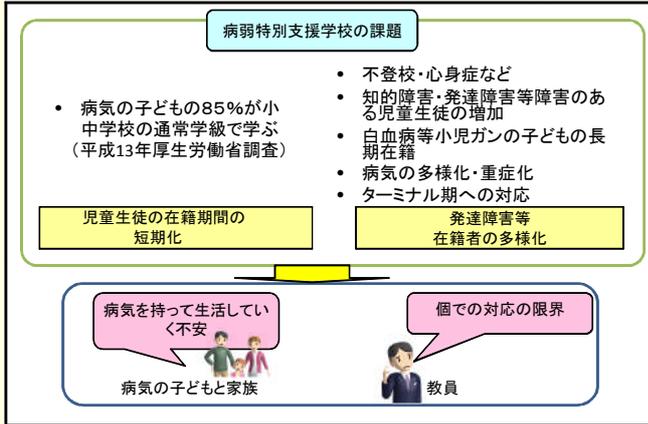
(概要版)

病弱特別支援学校における チーム支援の在り方

— 特別支援教育コーディネーターの活動の工夫に視点をあてて —

長期研修員 須藤 和子

主題設定の理由



病弱特別支援学校、医療、小中学校、労働、福祉機関等が連携し、協働で支援を行っていくことが必要

チーム支援

実現のために、特別支援教育コーディネーターは何をすべきか？

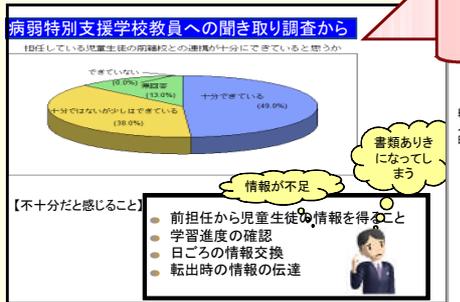
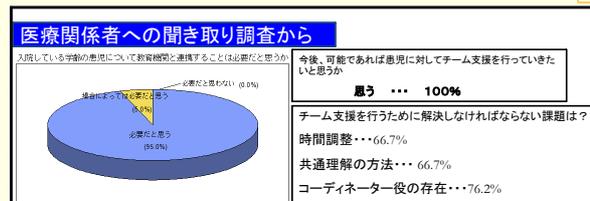
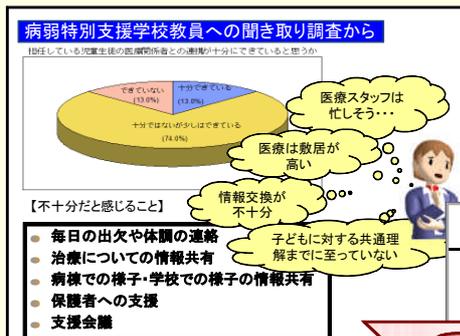
研究のねらい

病弱の子どもが病弱特別支援学校および地域の小中学校等において、安心した生活が送れることを目指し、病弱特別支援学校における特別支援教育コーディネーターが活動を工夫していくことで、校内はもとより、外部機関との連携によるチーム支援が充実することを明らかにする。

研究の経過

聞き取り調査をもとに「病弱特別支援教育コーディネーター活動表」を作成

聞き取り対象
・病弱特別支援学校教員
・医療関係者（医師・看護師）



病弱特別支援学校内	医療との連携	保護者への支援	小中学校への支援	児童生徒への支援	外部機関との連携
担任、学部職員とのアセスメント(校内チーム)	医師「看護師との連絡」調整	保護者からの相談対応	担任同士の見えづきをサポート	入院生活や学校生活に関する相談対応	G-NET会議への参加
多角的な実態把握と指導計画立案のために、フレンス・ミーティング法を導入する。	今後の医療との連携がスムーズに行えるよう、メンバー構成を検討する。	担任任せでなくチームでの支援を行うことを目指して、第三者として現在に至るまでの様子について話し、協力を共有する。併せて学校・医療機関への要望を聞き、支援について連携を行う。	特別支援教育コーディネーター・養護教諭等との連携	児童生徒の多様化に対応するための対応	他機関(特別支援学校/市町村教育委員会・児童相談所/支援センター等)との連携
転入時 「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成をサポート	看護師と生活目標やかわり方について検討	話し合いあり	話し合いあり	話し合いあり	話し合いあり
短時間で、より適切な指導計画の作成するため、複数メンバーで検討を行う。	学童での実態把握をもとに児童生徒の特性等について伝え、病棟・学校での生活目標を確認し合う。	話し合いあり	話し合いあり	話し合いあり	話し合いあり
各教科担当が役割確認を行えるように、作成メンバーを構成する。					

支援会議の実施

コーディネーター活動表

児童生徒の在籍時期によって、コーディネーターが行う活動の工夫についてまとめました。

「病弱特別支援教育コーディネーター活動表」を活用して様々なチーム支援を実践

つながろう、伝え合おう、一緒に考えよう！

事例の概要

事例1 発達障害があり、人のかかわりに困難を抱えるターミナル期の児童Aへの支援

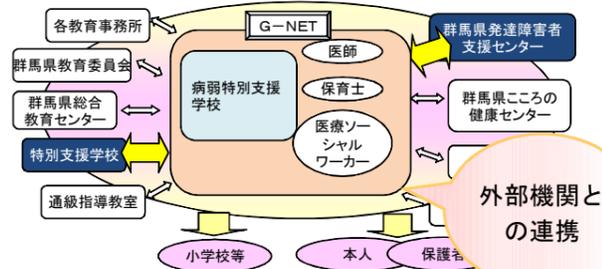
【コーディネーターの活動方針】

支援者が共通理解を図ることで、学校、病棟でのより適切なかかわりを考え、Aのストレスを軽減し、充実した生活が送れるようにする。

病弱特別支援学校内および医療との連携
(保護者支援・担任支援・チーム形態の変化)

その他の3事例

事例2 発達障害があり、転出後1年で病状が悪化、学校へ行くことを渋っている児童Bへの支援



外部機関との連携

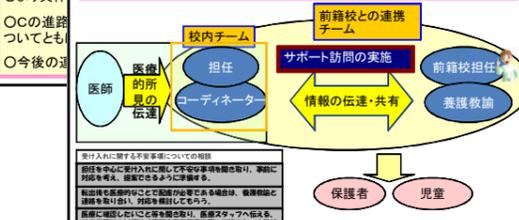
G-NETとは・・・
県内E病院内のネットワークである。

事例3 病気のため入退院を繰り返しているが、学習上の困難を抱え、今年度から特別支援学級に在籍している児童Cへの支援



前籍校との連携

事例4 入退院を繰り返している児童Dが病気を抱えて小学校で生活するための支援



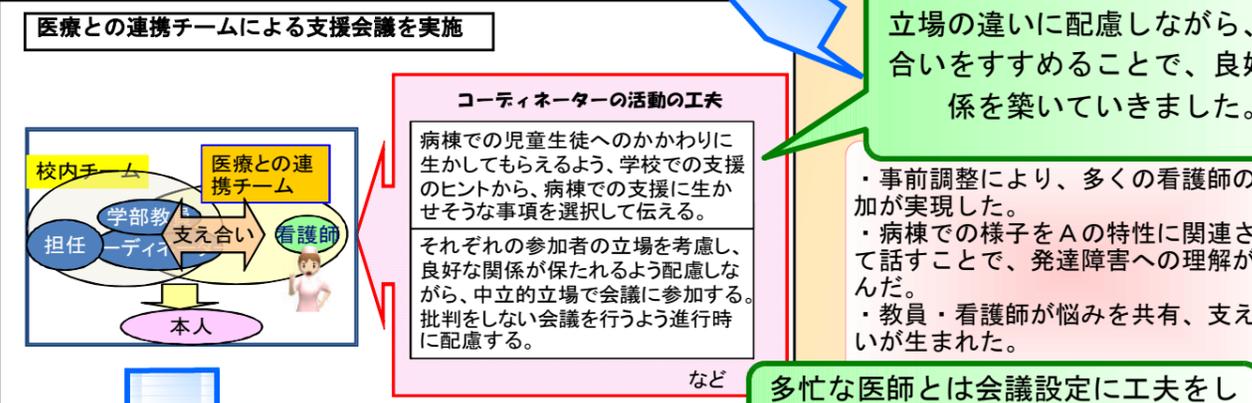
実践の経過



・保護者の心情理解が進んだ。
・病棟スタッフとの話し合いが必要。チームを編成

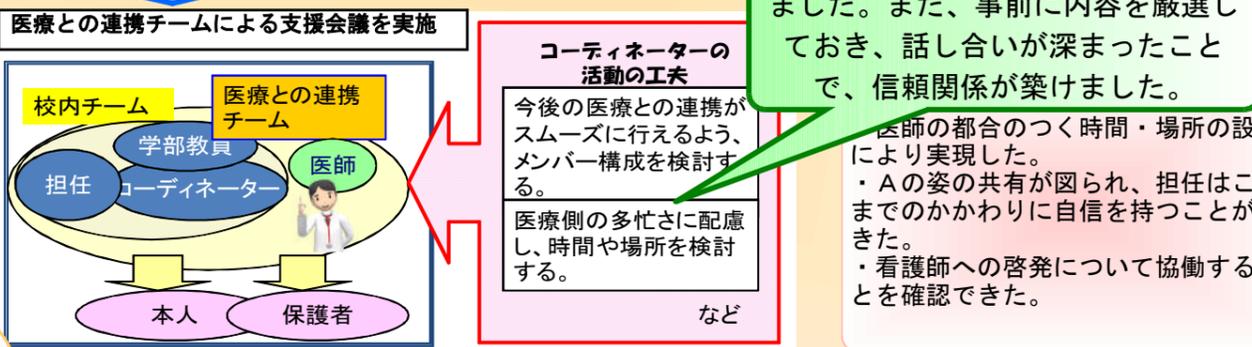
形態を弾力的に変化

・限られた時間の中で充実した会議が実現した。
・かかわりの少ない教員の参画意識が高まった。
・かかわりのヒントについて多くのアイデアが出された。



立場の違いに配慮しながら、話し合いをすすめることで、良好な関係を築いていきました。

・事前調整により、多くの看護師の参加が実現した。
・病棟での様子をAの特性に関連させて話すことで、発達障害への理解が進んだ。
・教員・看護師が悩みを共有、支え合いが生まれた。



多忙な医師とは会議設定に工夫をしました。また、事前に内容を厳選しておき、話し合いが深まったことで、信頼関係が築けました。

・医師の都合のつく時間・場所の設定により実現した。
・Aの姿の共有が図られ、担任はこれまでのかかわりに自信を持つことができた。
・看護師への啓発について協働することを確認できた。

結果と考察

児童や保護者のニーズに応じ、様々な形態のチームが実現した。

チームの中で支え合いが生まれ、さらに大きなチームに変化した。

ターミナル期という状況の中で、支援者が互いに支え合いながら、子どもへの適切な支援を行うことができ、保護者の不安の軽減にもつながった。



児童の気持ちの安定につながった。

保護者の心理的な不安の軽減ができた。



チーム支援

が有効であったと言える。

4つの事例において・・・

- チームにより、短期間でもよりの確な実態把握ができたり、指導方法のアイデアがたくさん生まれたりしました。
- 多忙な中でも医師・看護師と会議を持てたことで、多くの関係者が「ともに考える」ことの効果を実感できました。
- 紙面の引き継ぎだけではできない情報の共有が図られました。
- 病気の子どもの受け入れる小中学校の不安について知ることができ、今後の参考になりました。
- 養護教諭との連携の重要性に気づくことができました。

研究のまとめ

関係者への聞き取り調査から

校内連携

○事例検討会の実施が的確な実態把握に有効だったと思いますか。

とてもそう思う・少しそう思う・思う 100%
あまり思わない・全く思わない 0%

○指導内容方法が共有でき、適切な指導をおこなうことができたと思いますか。

とてもそう思う・少しそう思う・思う 100%
あまり思わない・全く思わない 0%

○自分の学級以外の児童についても協働で支援にあたる意識が高まったと思いますか。

とてもそう思う・少しそう思う・思う 100%
あまり思わない・全く思わない 0%

○コーディネーターの動きは複数の人間が協働して支援にあたるチーム支援の促進に役立ったと思いますか。

とてもそう思う・少しそう思う・思う 89.9%
あまり思わない 11.1%
全く思わない 0%

児童生徒の多面的な実態把握ができた

子どもの姿を深く掘り下げることができた

医療との連携

【医療関係者から】

学校の授業での姿がわかって子どもの理解につながった。

子どもの様々な姿を知ることは重要。

何人か看護師の対応が変わった。

病院にいる子どもたちの教育の補償がどれだけ重要であるかあらためて考えさせられた。

先生方がその子どもらしく生きることをずっと考えてくれた。ほくも励まされた。

今回のことを特別でなく、目の前の子どものことをみんなで考えるということが当たり前に行えるように、また一緒にやりましょう。

【担任から】

転出前の自立活動に役立てることができた。

学校の対応が医師の方針に沿っているか確認でき、共通理解が図れた。

前籍校との連携

【前籍校教諭から】

児童の学習についてなかなか相談できず、不安でした。これからも一緒に考えていきたい。

病院での様子は大変参考になりました。

児童の実態把握につながり、病弱特別支援学校と共有できた。

他の児童と変わらないような過ごし方になってしまう中、どこまで頑張らせていいのかいつも心配でした。今回の訪問でいろいろな話ができて、大変参考になりました。

医師の指示についての確に知ることができてよかった。

今後は是非このように連携していただけるとありがたい。

関係者それぞれがチーム支援の有効性を実感できました。

成果と課題

成果

- 4つの事例において関係者がつながり、情報が共有できたことで、実態把握がより深くできたり、かかわりのヒントが見付けられたり、指導方針が共有されたりした。
- 教員、また異なる職種の人々が交わり、病気の子どもの生活について共に考えることができた。
- 支援者が知る子どもたちの生活の一部ずつをつなぎ合わせることで、よりその子どものことを知ることができ、そのことにより、適切な支援を考えることができた。
- チーム支援により、個々の専門性が必ずしも高くなくても、「お互いを補い合い、支え合いながらその子どもにかかわっていくことで、個人のかかわりよりもより適切な支援につながる」ということを実感できた。
- 子どもの命に向き合わなければならない場所において、関係者の心理的なサポートという面においてもチーム支援は有効であったと言える。

課題

- 短期間でのチームの編成 ○医療との連携のさらなる工夫
- 「コーディネーター活動表」の加筆修正 ○チームとしての成熟 ○地域への支援へ

問い合わせ先

群馬県総合教育センター

担当係：特別支援研究係

0270-26-9218（直通）